

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02472

研究課題名(和文) 母性とkitchenからみる戦後英国演劇1945-1970

研究課題名(英文) Maternity and Kitchen in the Postwar British Theatre 1945-1970

研究代表者

川島 健 (Kawashima, Takeshi)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：60409729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は第二次世界大戦直後から1970年頃までの英国演劇を「母性」とkitchenという観点から考察することを目的とした。これまで戦後英国演劇はJohn OsborneのLook Back in Angerが初演された1956年を分岐点とし、Angry Young Menという視座で考えられてきた。それは男性性を前景化する作品であった。本研究は、男性中心主義的な視点の代わりに、保護し/保護される母子関係に着目し、それを醸成する場としてkitchenに注目する。そこで育まれる様々な母性が戦後英国の福祉国家政策を反映し、階級とジェンダーが入り混じる英国特有の家族問題を反映していると論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

男性的な価値が全面化する戦後イギリス演劇において、母性という女性性が大きな役割を果たしていることが分かった。しかし問題は演劇だけにとどまらない。福祉国家は家、そして家事をその基礎に置き、母性を神聖化する。そのような見方は、男性性と女性性は二項対立的に構築されるという考えを相対化し、また家事空間にまつわるジェンダー規範をも揺るがすことが判明した。

研究成果の概要(英文)：This study examines British theatre from Post World War II to around 1970 in terms of motherhood and kitchen. For the postwar British theatre, the year 1956 serves as the turning point when John Osborne's Look Back in Anger was premiered. It was a work that foregrounded masculinity. Instead of the male-centered standpoint, this study focuses on the mother-child relationship, putting emphasis on the concept of motherhood and the kitchen as a place to foster it. The various forms of motherhood nurtured in the kitchen reflect the post-war welfare state policies of the United Kingdom, where class and gender have entered the picture. It is clear that this reflects the unique British family issues that are mixed.

研究分野：イギリス演劇

キーワード：イギリス演劇 戦後 福祉国家 母性 男性性

## 1. 研究開始当初の背景

研究者は、2012年から2016年「戦後イギリス社会におけるBBCサードプログラムのラジオドラマ」(24520290)という題目で、研究を行ってきた。戦後イギリスにおいて、ラジオというメディアが大衆文化とエリート的な高尚でアバンギャルドな芸術を接合したことを分析した。

一方で、福祉国家となるイギリスでは、経済的な豊かさを背景に、多くの助成金が劇場と演劇に投下されたことに気づいた。ラジオという見えないメディアではなく、劇場という物理的な場において、戦後英国の様々な価値概念(男性性、女性性、大衆、公共性)が作られ、また、多くの問題(消費、世代、アメリカ化)が検討された。主に男性作家の作品が多く上演される。そこでは声高に社会に問題を叫ぶ男性の声が中心に据えられる。経済によっては解決しない問題の摘発が、男性的なボイスによってなされる。

一方研究全般では、2005年以降、英国戦後演劇を文化・社会史的にとらえる研究が盛んになった。Peter Kalliney, *Cities of Affluence and Anger* (2006)が福祉政策下における住居環境という観点から *Angry Young Men* を分析している。また David Tucker (ed.), *British Social Realism in the Arts since 1940* (2011) は1940年代以降の社会主義リアリズムの浸透を広い視野でとらえている。

しかし、それらの研究は英国戦後演劇を男性的な視座でとらえ、女性的な要素と視線を排除したままである。後者を回復するためにジェンダー理論への接続が必要である。一方で、ジェンダーやフェミニズム演劇の研究は、1990年頃から盛んになっては来ている。Alan Sinfield, *Out on Stage: Lesbian and Gay Theatre in the Twentieth Century* (1999)はその先駆的な研究だが、以後は *Queer Performance* などに研究のトレンドが移り、ストレートプレイ研究におけるジェンダー視座の継続が図られていない。

## 2. 研究の目的

本研究は戦後イギリス演劇の書き換えである。男性的な価値観でおおわれてきたこの時期の劇作を、別の角度から考察を加え、新しい見方を提示することが目的である。そのために以下の2点に着目する。

### 1) 女性性の問題

戦後イギリスのリアリズム演劇は *Angry Young Men* という視点から語られることが多い。それは息子の「父への不信」を強調することで男性中心的な解釈を前提としてきた。この時期の演劇作品が、フェミニズム的視点の欠如が叫ばれるようになるのはようやく1960年代後半である。ジェンダー的には、戦後から1960年代は保守的な時代として考えられてきた。ジェンダーの観点からこれらの作品を考察した古典的な研究 *Micheline Wandor, Look Back in Gender: Sexuality and the Family in Post-War British Drama* (1987, 改訂版2001)があり、フェミニズム的観点から男性中心主義を批判している。本研究は、*Nancy Fraser, Fortunes of Feminism* (2013)など近年のフェミニズム研究の成果を踏まえつつ、単に家庭を守るだけではない様々な「母性」の表れを分析する。

### 2) 演劇史の問題

戦後のイギリス演劇は、*John Russell Taylor, Anger and After* (1962)以降、1956年を分水嶺としてきた。しかし *Dan Rebellato, 1956 and All That* (1999)がその時代区分に異を唱えてから、そのような区分の恣意性を問う *Simon Shepherd, The Cambridge Introduction to Modern British Theatre* (2009)などの研究が出てきている。本研究はこれらの研究を継承するだけでなく、演劇を国家の管理下に置く政策にも目を配る。*Michel Billington, State of the Nation: British Theatre Since 1945* (2009)は *Arts Council* の設立や国立劇場の建設などの政策と劇作の関係を歴史的に記述した大作だ。本研究はそれらを参照しながら戦後演劇史の書き換えを試みる。

最新のフェミニズム研究と理論を援用しつつ、男性性と女性性に二項対立を攪乱するような母性の存在と機能、働きに焦点をあてて、英国演劇の歴史の書き換えを行うことが大きな目的になる。

## 3. 研究の方法

本研究は *Kitchen Sink Drama* という言葉を利用する。もともと美術用語であった *Kitchen Sink Realism* が演劇に転用されたものだが、イギリス演劇においては忘れられた言葉であった。本研究でその言葉を利用するのは以下の3点の理由からである。

1) 社会主義リアリズムとのつながりを意識し、60年代以降のニューレフトに影響を受けた劇作家との連続性を明らかにする。

2) **kitchen** という場所が持つ政治性を明らかにする。従来 **Angry Young Men** の演劇は、**Drawing Room Comedy** と対比的に考えられてきたが、**Kitchen Sink Drama** はそれとの連続性をも持つカテゴリーだ。**Nicholas Grene, Home on the Stage – Domestic Spaces in Modern Drama (2014)** は、家の内部というプライベート空間を舞台にする近代劇を系譜的に分析している。これらの研究を参照しながら、**kitchen** という空間でプライベートとパブリックが交錯する様子を描き出す。

3) **kitchen** が醸成するジェンダーの変化から、戦後英国における家族形態の変化を描き出す。家事を行う男性の登場する **Harold Pinter** の劇作や、同性愛者のいる家庭を描く **Joe Orton** らの劇作など 1960 年代の作品を論じるための視点として **Kitchen** を用いる。

#### 4. 研究成果

戦後イギリス演劇を **kitchen** という視点から考察することで、以下のようなさまざまな母性のかたちが発見された。

1) 階級差を埋める母性。 **Terence Rattigan** や **J. B. Priestly** ら作品では階級差のあるカップルが登場するが、彼らの愛は保護し / 保護される母性愛に代わる。これは **Osborne** の **Look Back in Anger** にも当てはまる。

2) 再構築される母性。 **Ann Jellicoe** や **Edward Bond** の作品では、子を産みながらも母性を持たぬ母親が描かれる。このような非母性化した母親が描かれる一方、 **Sheila Delaney** は社会構築される母性を描く。本能と切り離された母性が福祉国家政策にたいして持つ批判の射程を明らかにする。

3) トランス・ジェンダー化する母性。英国演劇において同性愛が大っぴらに描かれるのは前記した理由により 60 年代後半である。しかしそれは突然生じたのではなく、家事空間である **kitchen** にいる男性を描く **Pinter** らの作品がその下地を作ったと考えるべきである。母性が構築されるものという認識が男性における母性を養い、それが同性愛演劇への道を切り開いた。

このような、社会主義リアリズムと **Angry Young Men** という視座双方に通底する男性性を相対化することができた。男らしさを前景化する登場人物は母性によって支えられる。あるいはマッチョな男が母性的に介護、保護する役割を担うことがある。母性は男性 / 女性という二項対立を攪乱することが判明した。

本研究で獲得された視座をもう少し拡大し、1970 年代以降のイギリス演劇をも視野におさめることが可能であることが徐々に明確になってきた。2018 年度に研究計画最終年度前年度の応募研究に応募し、2019 年度から「**State-of-the-Nation Plays と 1970 年代英国演劇**」(19K00463) を開始することになった。全研究では **Kitchen** をトポスとして、1945 年から 70 年前後の演劇作品を考察していたが、70 年代以降は、国家や社会を論じる劇作が増え、家庭が舞台になる演劇作品は減少する。それにより、イギリス演劇はどのような変化を被ったのか、引き続き研究を続けていく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 川島健	4. 巻 83
2. 論文標題 「演出家の役割：英国演劇の場合」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 セゾン文化財団ニュースレター『viewpoint』	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川島健	4. 巻 80
2. 論文標題 「福祉政策下の男性性 - 『怒りを込めて振り返れ』とマザリング」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『主流』	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川島健	4. 巻 100
2. 論文標題 「ケネス・タイナンと感情の共同体 ニューレフト勃興期の英国演劇」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『同志社大学英語英文学研究』	6. 最初と最後の頁 89-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/pa.2018.0000000414	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川島健	4. 巻 99
2. 論文標題 若者、ジャズ、社会主義 - 『怒りを込めて振り返れ』の1950年代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 同志社英語英文学研究	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Kawashima	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 John Osborne 's Look Back in Anger and Generational Discontinuity	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Generational Conflict in British Drama and Play	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Takeshi Kawashima
2. 発表標題 Queer North: Louis MacNeice's Travel Writing on Ireland
3. 学会等名 Annual Conference of Pacific Ancient and Modern Language Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Takeshi Kawashima	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 342
3. 書名 'Experienc'd Age Knows What for Youth Is Fit'?: Generational and Familial Conflict in British	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----